

中エジプト語 *sdm-f* 活用への 比較アフロアジア言語学的アプローチ

吉野 宏志[†]

キーワード : エジプト語、東クシ語、*sdm-f*、動詞活用、接尾辞活用

1 はじめに

古代エジプト語（以降、エジプト語）は大きく 5 つの言語段階に分類され、古い方から順番に「古エジプト語」「中エジプト語」「新エジプト語」「民衆文字エジプト語」「コプト・エジプト語」と呼称される。中エジプト語は新エジプト語以降の時代に入ってから碑文や文学作品などにおける古典言語として併用されていた。文字資料の豊富さから、エジプト語研究は中エジプト語を中心として盛んに行われてきた。しかし中エジプト語の最も基本的な動詞活用である *sdm-f* 活用には未だ不明確な点が残されている。その 1 つがこの活用の起源と発達である。

従来のエジプト語研究では内的研究とセム諸語との比較再建が盛んに行われてきたが、近年ではアフロアジア語族の研究が進んできたことを受け、「アフロアジア語としてのエジプト語」の研究が活発になってきている。本稿では比較アフロアジア言語学的な視点を持つ *sdm-f* 活用の起源と発達に関する 2 つの仮説を検討し、その将来性を考察する。

[†] 筑波大学大学院人文社会科学研究所一貫制博士課程

1.1 本稿の目的

筆者は、今後のエジプト語動詞体系の研究において、セム語派を中心とする比較言語学的研究から、アフロアジア語族全体の中におけるエジプト語派の位置づけを念頭に置いた、比較アフロアジア言語学的な研究への転換が必要であると考えている。そこで本稿では、アフロアジア語族あるいはアフロアジア語族という大局的な見地から行われている中エジプト語の *sdm-f* 活用に関係する研究を検討し、比較アフロアジア言語学的エジプト語研究の可能性を提示することを目的とする。

アフロアジア語族、ひいては祖語を視野に入れた研究を行なう上で、本来ならば出来る限り古い時代のデータ（古エジプト語）を参照すべきであるが、それについては今後の課題として、本稿では中エジプト語に焦点を絞って議論を進めることとする。

2 先行研究と問題点

2.1 *sdm-f* 活用

sdm-f 活用にはいくつかの派生形があり異なる TAM（テンス・アスペクト・ムード）を表現する。基本形であると考えられるのが *sdm-f* 形で、Sethe (1899: 137 節) はこれが未完了相の能動態を表すとした。構造としては「動詞+接尾代名詞」あるいは「動詞+名詞」となっており、この接尾代名詞は所有格代名詞と同じであることが知られている。主節において通常は現在時制で訳され、副詞節では現在時制もしくは主節と同じ時制を表す。動詞によっては主節において第 2 語根が重ね書きされる異形態が存在している。Gardiner (1957) は、主節において重ね書きのない形を完結相 *sdm-f* 形、重ね書きのある形を非完結相 *sdm-f* 形として分類した。この Gardiner の分類では表層的な形態に依存したものであったが、Polotsky (1976) では動詞クラス¹毎に分類を行っており、Allen (2010:

¹ 強動詞は動詞形によって変化が見られることが稀であり、全ての子音が保たれる。第 2 語根重複動詞は 2 つ目の語根が未完了相あるいは非完結相において重ね書きされる。第 3 語根弱動詞は 3 つ目の語根が *w* や *j* などになっている動詞で、多くの場合この 3 つ目の語

267-268) でも同様な分類法が取られている。また *sdm-f* 形には前望相 (prospective) あるいは未来時制を表すものがあり、これは Gardiner による完結相と同じ形であり、第 3 語根弱動詞には *w* や *j* が動詞の直後に現れることがある。接続法 (subjunctive) *sdm-f* 形と呼ばれる動詞形は中エジプト語で既に前望相 *sdm-f* 形と混同されて未来時制を表す際に用いられた (Allen 2010: 291)。

sdm-f 形に次いで使用頻度の高い派生形 *sdm-n-f* 形は完了相の能動態を表す。「動詞+接尾辞 *n*+接尾代名詞」または「動詞+接尾辞 *n*+名詞」という構造をしており、*sdm-f* 形と同じ接尾代名詞を用いる。動詞については前望相 (あるいは完結相) と同形、つまり重ね書きがされない形のようにだが、第 2 語根重複動詞については重ね書きのある *sdm-n-f* 形も存在する (Allen 2010: 228)。

受動態には、接尾辞 *-tw* を伴うもの、接尾辞 *-w* を伴うもの、そして強動詞の第 3 語根が重ね書きされる形の 3 つがある。未完了相と接続法の *sdm-f* 形は *-tw* を伴って *sdm-tw-f* 形となるが、この時にも動詞クラスによって重ね書きが現れることがある (Allen 2010: 251; 263)。完了相 *sdm-n-f* 形も *-tw* を伴うことがあるが、それは関係節の動詞形であるとされ (Allen 2010: 232)、副詞的語句²が後続する副詞句焦点化構文を成している。完了相あるいは過去時制の受動態には接尾辞 *-w* を伴う *sdm-(w)-f* 形が用いられる (Allen 2010: 296)。しかし *sdm-(w)-f* 形ではしばしば接尾辞 *-w* が明記されないため、判別には文脈などを頼る必要がある。強動詞の第 3 語根が重ね書きされる語形は前望相受動態であるが、特に中エジプト語以降の文字資料における出現頻度は稀である。

この他にも接尾辞 *-hr*、*-k3*、*-jn* が動詞と代名詞の間に置かれると、直前の出来事に付随する出来事を表す動詞形 (contingent verb-forms; 以降、付随形) となる (Allen 2010: 307-314)。付随形の接尾辞はそれぞれ *hr* 「話

根は現れない。主節の未完了相あるいは非完結相では第 2 語根が重ね書きされるが、第 2 語根重複動詞とは異なる点は副詞節で重ね書きされない。

² 副詞、副詞句、前置詞句、副詞節など副詞相当の語句と節を指す。

す」、*k3*「考える」、*j.n*「言った」(動詞 *j*「言う」の完了相 *sdm-n-f* 形)が起源であると考えられる。アフリカの言語において「言う、話す」などを表す動詞が文法化される傾向がある (Satzinger 2003: 397)。

また、*sdm-f* 形と *sdm-n-f* 形は名詞節・関係節 (=形容詞節)・状況節 (=副詞節)としても機能することが出来る。名詞節 *sdm-f* 活用形は文の主語や、動詞や前置詞の目的格となり、状況節 *sdm-f* 活用形を含む副詞的語句を伴って副詞的付加部に焦点を当てる構文を形成する。Allen (2010: 24-25 節) などでは *sdm-f* 活用の名詞節・関係節・状況節としての用法は動詞述語から派生したものであると捉えている。それに対して Polotsky (1944; 1965; 1976) は *sdm-f* 活用がそもそも関係節か状況節であるとしている点で異なっている。

2.2 セム諸語との比較研究

セム語研究では動詞形を人称接辞の動詞に対する位置によって、接頭辞活用と接尾辞活用という 2 つに分類する。それぞれ未完了相と完了相と呼ばれることが多いが、言語によって呼称は異なる。Sethe (1899) が未完了相と完了相という区分をしているのはセム語学の分類方法に則ったものであることが分かる。セム語派ではこれら 2 つの活用は文法的なものであり、原則としてあらゆる動詞に適用することができる。

両活用の動詞形について数や分布は言語によって異なっている。例えば、西セム語に属する聖書ヘブライ語やウガリト語では両活用に 1 つずつ動詞形が存在するが、東セム語のアッカド語や南セム語のアムハラ語³では接尾辞活用が 1 つと接頭辞活用に複数の動詞形がある (表 1)。

アッカド語では表 1 の接頭辞活用 (a) が単純過去時制、(b) が非過去時制、(c) が完了時制というように異なる時制やアスペクトを表している。接尾辞活用は状態形 (stative) とも呼ばれ、動作の結果としての状態を表す。アムハラ語では接尾辞活用 (i) が過去時制を、接頭辞活用

³ アムハラ語はセム語派西セム語エチオピア・セム語南部グループに属する言語である (Hackett 2006: 930-931)。

の 2 動詞形 (d-e) がともに現在時制を表す。アムハラ語の接頭辞活用のバリエーションは動詞クラスによって決定されるものである。

セム語の動詞形には語幹の交替によってさらに細かい表現ができるが、その中にアッカド語で D 語幹 (聖書ヘブライ語の Piel 語幹に相当) と呼ばれる音重複 (gemination) のある語幹がある。このアッカド語 D 語幹の動詞形では接頭辞活用 (b) でなくとも語根の第 2 子音が 2 度現れる。接頭辞活用 (b) と組み合わせて用いられる場合には語頭の母音が基本の語幹とは異なるため、別の動詞形であることが明らかである。

表 1 : セム諸語の接頭辞活用と接尾辞活用の数と分布 (Buccellati 1997; Hudson 1997; Pardee 1997; Steiner 1997 参考)

分類	言語名	接頭辞活用	接尾辞活用
東セム語	アッカド語	a) $-C_1C_2uC_3-$ b) $-C_1aC_2C_2aC_3-$ c) $-C_1taC_2aC_3-$	h) $C_1aC_2VC_3-$
	アムハラ語	d) $-C_1\ddot{a}C_2C_3$ e) $-C_1aC_2C_2C_3$	i) $C_1\ddot{a}C_2C_2\ddot{a}C_3-$
西セム語	聖書ヘブライ語	f) $-C_1C_2VC_3$	j) $C_1aC_2aC_3-$
	ウガリト語	g) $-aC_1C_2uC_3-$	k) $C_1aC_2aC_3-$

このように接頭辞活用が TAM を表現するのに対して、セム諸語の接尾辞活用は時制について無標⁴である傾向がある。エジプト語にはこの接尾辞活用については起源を共にする動詞形がある。アッカド語と同様に状態形と呼ばれ、人称接尾辞にも共通点が多く見られる (表 2)。

中エジプト語の状態形とアッカド語の状態形を比較すると、3 人称女

⁴ アムハラ語では過去時制を表す動詞形 (Hudson 1997:470-471) として確立しているため例外となるが、アッカド語では接尾辞活用 (状態形) が行為の結果としての状態を表すことから完了形や受動態の意味を持つことが多く、そこから過去時制へと変化することは容易に考えられる。

性複数以外で人称接尾辞の子音パターンが重なっている。中エジプト語の接辞に含まれている *w* や *j* はアッカド語の接辞の母音に対応するように現れている。この人称接辞はエジプト語において状態形のみで用いられる。アッカド語の状態形と同根である根拠は、子音パターンと母音の位置だけでなく、動詞以外にも名詞や形容詞に状態形の人称接尾辞を付加することで述語にすることが出来るという共通した特徴の存在である。そしてアッカド語は他のセム諸語（聖書ヘブライ語やウガリト語など）と接尾辞活用を共有していることから、エジプト語とセム語の比較研究を行うことができる。

表 2：接尾辞活用の人称変化

	セム語派			エジプト語派
	アッカド語 √ <i>prs</i> 「分ける」	ウガリト語 √ <i>ktb</i> 「書く」	聖書ヘブライ語 √ <i>ktb</i> 「書く」	中エジプト語 <i>šdm</i> 「聞く」
1cs	<i>pars. āku</i>	<i>katab.tu</i>	<i>kātab.tī</i>	<i>šdm.kw</i>
2ms	<i>pars. āt(a)</i>	<i>katab.ta</i>	<i>kātab.tā</i>	<i>šdm.t(j)</i>
2fs	<i>pars. āti</i>	<i>katab.ti</i>	<i>kātab.t</i>	
3ms	<i>paris</i>	<i>katab</i>	<i>kātab</i>	<i>šdm(.w)</i>
3fs	<i>pars.at</i>	<i>katb.at</i>	<i>kātāb.ā</i>	<i>šdm.t(j)</i>
1cp	<i>pars. ānu</i>	* <i>katb.ān</i>	<i>kātab.nū</i>	<i>šdm.w(j)n</i>
2mp	<i>pars. ātunu</i>	<i>katab.tum</i>	<i>kātab.tem</i>	<i>šdm.twn(j)</i>
2fp	<i>pars. ātinu</i>	<i>katab.tin</i>	<i>kātab.ten</i>	
3mp	<i>pars. ū</i>	<i>katb.ū</i>	<i>kātāb.ū</i>	<i>šdm.w</i>
3fp	<i>pars. ā</i>	* <i>katb.ā (?)</i>		<i>šdm.t(j)</i>

しかし中エジプト語にはセム語にあるような接頭辞活用の存在が確認されていない。中エジプト語において接頭辞活用の名残ではないかと考えられるのが、接頭辞 *j*-が付加される一部の命令形と接続法 *šdm-f* 形で

ある (Allen 2010: 190; 249)。意味機能から見ると、未来時制として用いられることがある接続法 *sdm-f* 形は、非過去や未完了を表すセム語の接頭辞活用と比較することができる。しかしこの接頭辞には主語の人称による変化は見られず、セム語で 2 人称や 3 人称女性によく見られる *tV*-という形は見つかっていない。

つまり少なくともセム語と同じような接頭辞活用がエジプト語にはないということになる。セム語との比較が可能なのは、中エジプト語の形態形とセム諸語の接尾辞活用に限られている。

2.3 共通認識と問題点

これまでの研究により、*sdm-f*あるいは*sdm N*という構造(動詞 - 代名詞/名詞)を持つ動詞形が存在し、派生形がいくつか存在している(*sdm-n-f*、*sdm-jn-f*、*sdm-hr-f*、*sdm-k3-f*)という認識は共有されている。それぞれの動詞形が文中でどのような意味を持つのかは、文献学的研究によって歴史的背景や文脈から理解されてきた。動詞活用の解釈について対立する学説は存在しているが、文献の残されていない段階(つまり史前エジプト語)を想定せざるをえない形態論的な問題については決定的な結論を下している学説はみられない。つまり、*sdm-f*活用の起源や発達は未だ解明されていない。

*sdm-f*形や*sdm-n-f*形は名詞節・関係節・状況節としても用いられることがある点で意見は一致しているが、Allen (2010: 26.31 節)とPolotsky (1944; 1965; 1976)のようにその位置づけが異なっている⁵。

また、アフロアジア祖語に再建される接頭辞活用がエジプト語には見られない。この接頭辞活用は、セム諸語を見る限りでは、アスペクトやムードを表す動詞活用であると考えられる。中エジプト語では、接頭辞活用が表すTAMが*sdm-f*活用によって表されている。エジプト語にはそ

⁵ Allen は、名詞節・関係節・状況節としての用法が、動詞述語としての *sdm-f* 形から派生したものであると考えている。しかし Polotsky は *sdm-f* 形が動詞述語としてではなく関係節や状況節として働いているとしている。

の痕跡が確認されていないという点がこの問題を解決から遠ざけている。

全ての動詞クラスで全ての形態的な差異が明らかではないという点でも見解の一致がある。これはコプト語以前のエジプト語資料全体の特徴である、子音のみ表記するシステムが存在することや、接辞が明示的ではないことが要因となっている。同様な表記システムはヘブライ語やアラビア語などのセム語にも見られるが、これらの言語においては *matres lectionis* (「読みの母」) や *tashkil* (アラビア文字の母音識別記号) などが後の時代に生まれた。そのため少なくともこの方法が導入された時代以降の発音について知ることができる。エジプト語はコプト語の段階でギリシャ文字の導入によって母音が初めて明記されるようになった。それ以前の新しいエジプト語やデモティック・エジプト語でも既存の文字 (特に表音文字の *w* や *j*) を組み合わせて母音を表そうとする試みが見られる (Junge 2005: 41-42; Johnson 2004: 2; Peust 1999: 217)。しかしコプト語以前のエジプト語における音素について、正確な音価については未だコンセンサスが取れていない。そしてヘブライ語やアラビア語では付加されている接辞が明確であるため動詞クラスの判別が可能となっている。

セム諸語との比較における最大の問題は、この *sdm-f* 活用と同起源の動詞活用がセム語派には見られないことである。そのため適切な比較ができず、内的再建および言語類型論に頼ることになる。アフロアジア祖語と中エジプト語の空き間をつなぐ史前エジプト語の動詞活用を研究するには、比較による再建が必要である。

3 新たな仮説・解釈

3.1 Satzinger (2003) 説

sdm-f 形の主語人称が代名詞で表される場合、所有格として用いられる接尾代名詞が使われていることから、「名詞的動詞形+所有格接尾代名詞」から構成される *sdm-f* 形は名詞句であると言える。しかし *sdm-f* 形が名詞句である場合、名詞節を作る *sdm-f* 形が成り立たない。Satzinger (2003: 395) は *sdm-f* 形が独立形 (absolute form) であると解釈すること

る *sdm sw* 「彼は聞いている」という構文がある (Gardiner 1957: 374 節)。この構文でも主語の標示に従属代名詞が使われているが、Gardiner は従属代名詞が摩滅によって接尾代名詞 (例: *sw > f*⁷) になったと考えた。

sdm-n-f 形でも主語が代名詞の場合、主語人称は接尾代名詞で表されるが、接尾辞 *-n* が動詞と代名詞の間に置かれている。Satzinger は接尾辞 *-n* が前置詞 *n* であるとし、*sdm-n-f* 形の *n-f* が与格表現を起源に持つとしている。Gardiner (1957: 411 節) も、古エジプト語において「前置詞 *n* + 接尾代名詞」が所有表現に用いられていたことから、*sdm-n-f* 形の *n-f* は所有表現であるとしており、「名詞的動詞形 + 前置詞句」という構造から成り立っていると考える点において伝統的な解釈に則っている。

sdm-n-f 形は完了相であるとされるが、完了相 (現在完了時制) は所有表現から発達する傾向が見られる。Satzinger (2003: 396) は古英語、現代英語、NENA (現代アラム語北東諸方言)⁸ の例を挙げている。その中でもセム語派に属する NENA に注目し、中エジプト語の *sdm-n-f* 形が同様に所有表現から発達したと仮定している。ただし、これは中エジプト語と NENA が同一の原因や理由によって同様な動詞活用を発達させた主張するものではない。あくまで中エジプト語に見られる動詞形と類似性の高いものが同じ語族の言語においても存在していることを示すに留まる。

- | | | | |
|-----|---|-----------|--------------|
| (4) | <i>naša šwīq-ā-</i> | <i>le</i> | <i>bahta</i> |
| | 男 捨てる-3fs | 3ms | 女 |
| | 主語 過去分詞-目的語一致標示 | 主語一致標示 | 目的語 |
| | 「その男はその女を捨てた」(Satzinger 2003: 396 ; グロス は筆者による) | | |

⁷ *sw* から *f* へ直接変化したかどうかは確かではないが、*f* は **su* が音変化したものであると考えられており、どちらも **su* から発達したものであると言える (Loprieno 1995: 64)。

⁸ Satzinger (2003: 396) はイランのウルミア (Urmia) で話されている Assyrian Neo-Aramaic を参照している (http://www.ethnologue.com/%5C/15/show_language.asp?code=aii)。

- (5) **jrj n N* > *jrj-n* *N*
 行う 名詞.与格 行う-完了相 名詞.主語
 *「行うことは N に属する」>「N は行なった」(Satzinger 2003: 396 ;
 グロス は筆者による)

(4)は NENA の例文であるが、*šwīq-ā-li-ø* が動詞述語の部分となっており、*li-ø* が主語を示す接尾辞となっている。*le* は NENA において与格を表す前置詞 *l* に 3 人称男性単数の接尾代名詞 *-e* が付加されたものである。(5)は中エジプト語の完了相が所有表現から完了相へと変化したことを表しており、*n* が与格を表す前置詞から動詞の接尾辞へと異分析されている。

これら 2 例から、中エジプト語と NENA では共に与格を表す前置詞が動詞の接尾辞へと変わっていることが分かる。しかし、NENA では名詞主語であっても接尾代名詞による主語一致標示が残され、目的語と一致する標示も動詞に付加される。中エジプト語では動詞に付加されるのは主語の接尾代名詞だけであり、名詞主語の場合には主語標示は見られず、目的語の標示はいずれの場合にも現れないという点で大きく異なっている (Satzinger 2003: 396-397)。

sdm-n-f 形で用いられている動詞形について、完結相 *sdm-f* 形と同じ語基である可能性にも言及している。NENA の過去分詞と所有表現による完了相の構文は他動詞に限られたものであったが、2 次的に自動詞へ適用されるようになった (Satzinger 2003: 397)。中エジプト語では少し異なっており、動詞の前に後接語を伴わず副詞句に焦点を当てる構文をなす名詞節 *sdm-n-f* 形においては自動詞と他動詞の両方が使われるが、通常の *sdm-n-f* 形で使用されるのは他動詞に限られている。自動詞の完了相を表すために用いられる動詞形は状態形である。Satzinger (2003: 397) は、これらの特徴から、名詞節 *sdm-n-f* 形は伝統的な解釈に則っており他の言語でも見られるように過去分詞が用いられており、通常の *sdm-n-f* 形は動詞の別に関わらず形成することができる動詞的名詞であるとして

いる。

Satzinger (2003) 説を支持するメリットは、伝統的な解釈との整合性を保ちながら、従来のエジプト語研究では大きく取り上げられていなかった能格や NENA との類似点が指摘されていることである。この仮説を支持する上で問題となるのは、比較できる適切な対象が依然として見つかっていないということである。

NENA の現在時制は能動分詞が元になっており、3 人称は分詞の曲用 (declension) 接辞 (男性 \emptyset 、女性 *-a*、複数 *-i*)、1 人称と 2 人称は前接代名詞 (1 人称単数 *n*、2 人称単数 *t*、1 人称複数 *x*、2 人称複数 *tun*) が用いられる (Khan 1999: 90)。表 3 は NENA の現在時制と過去時制で用いられる人称接尾辞と所有格代名詞を対比させたものである。主格接尾辞は現在時制の主語と過去時制の目的語、与格接尾辞は現在時制の目的語と過去時制の主語として機能する。

表 3 : NENA の動詞人称接尾辞と所有格代名詞
(Khan 1999: 90-91; 2007: 316 参考)

人称	主格接尾辞	与格接尾辞	接尾代名詞
3ms	<i>-\emptyset</i>	<i>-le</i>	<i>-e / -eu</i>
3fs	<i>-a</i>	<i>-la</i>	<i>-a / -aw</i>
3pl	<i>-i</i>	<i>-lu</i>	<i>-u</i>
2ms	<i>-et</i>	<i>-lox</i>	<i>-ox</i>
2fs	<i>-at</i>	<i>-lax</i>	<i>-ax</i>
2pl	<i>-etun</i>	<i>-loxun</i>	<i>-xun</i>
1ms	<i>-en</i>	<i>-li</i>	<i>-i</i>
1fs	<i>-an</i>	<i>-li</i>	<i>-i</i>
1pl	<i>-ex</i>	<i>-lan</i>	<i>-an</i>

中エジプト語と NENA の所有格接尾代名詞は 3 人称においてその違い

が顕著となる。表 4 は中エジプト語 *sḏm-n-f* 形と NENA 過去時制を対応させたもので、主語人称を示している接尾代名詞を太字にしてある。

表 4 : 中エジプト語 *sḏm-n-f* 形と NENA 過去時制

	中エジプト語 <i>sḏm-n-f</i> 形	NENA 過去時制
1cs	<i>sḏm-n-j</i>	<i>qtil-l-i</i>
2ms	<i>sḏm-n-k</i>	<i>qtil-l-ox</i>
2fs	<i>sḏm-n-t</i>	<i>qtil-l-ax</i>
3ms	<i>sḏm-n-f</i>	<i>qtil-l-e</i>
3fs	<i>sḏm-n-s</i>	<i>qtil-l-a</i>
1cp	<i>sḏm-n-n</i>	<i>qtil-l-an</i>
2cp	<i>sḏm-n-tn</i>	<i>qtil-l-oxun</i>
3cp	<i>sḏm-n-sn</i>	<i>qtil-l-u</i>

NENA 過去時制の起源は、親言語である東アラム語の受動態表現である。この表現はインドヨーロッパ語族インド・イラン語派イラン諸語との言語接触によってもたらされたもので、方言群の 1 つである NENA のみで動詞活用として定着したとされる (Khan 1999: 94-95)。イラン諸語は能格言語であることが知られており、NENA 過去時制のもととなった受動態表現のみ能格性が働いている (分裂能格)。また他のアラム語が持っている接頭辞活用と接尾辞活用が NENA には見られず、この新たに発達させた時制表現のみが機能している。

- (6) *barux-owal-i* *baxt-oke* *garš-i-wa-la*
 友-pl-1cs 女-定冠詞 引く.能動分詞-3pl-過去-3fs
 「私の友達がその女性を引っ張っていた」 (Doron & Khan 2012: 47)

- (7) *baxt-oke* *barux-owal-i* *gərš-i-wa-la*
 女-定冠詞 友-pl-1cs 引く・受動分詞-3pl-過去-3fs
 「その女性が私の友達を引っ張った」 (Doron & Khan 2012: 47)

(6)と(7)はそれぞれ NENA の現在時制と過去時制の例である。どちらも動詞形が文末にあり、語基は異なるが動詞接尾辞は全く同じ形態素が付加されている。しかし接尾辞の役割が交替していることが例文の訳からもわかる。(6)は主格接尾辞-*i* が主語を、与格接尾辞-*la* が目的語を表しているが、(7)では主格接尾辞-*i* が目的語を、与格接尾辞-*la* が主語を表すようになっている。この時、(7)では能格性が働いており、主語が与格表現によって表されるという特徴が現れている。この動詞形の部分を逐語訳すると、「彼らが引っ張られるのは彼女によってであった」となる。この点について中エジプト語 *sdm-f* 活用とは異なっている。

sdm-f 活用の起源と発達に能格が関わっていると仮定することはできる。しかし能格言語との接触があった NENA を除いて、古代のセム諸語や現代のアフロアジア諸語は全て対格言語であると Satzinger 自身も認めている (Satzinger 2003: 397)。この事から能格という観点で比較研究を行うことは難しい。

3.2 Banti (2001) 説

Banti (2001) は東クシ諸語で独自に発達したと考えられているアフロアジア祖語に再建されない接尾辞活用の存在と、その動詞活用形と *sdm-f* 活用の関連性について論じている。本稿では、アフロアジア祖語まで溯れる接尾辞活用との区別をするために、この東クシ諸語に独特な接尾辞活用を東クシ動詞活用形と呼称する。

東クシ動詞活用形に関する Banti (2001) の論点は、東クシ動詞活用形が (1) アフロアジア祖語由来の接尾辞活用ではなく、(2) 中エジプト語 *sdm-f* 活用との類似点がある、という 2 点にまとめられる。

3.2.1 アフロアジア祖語に遡らない接尾辞活用

(1) の主張について確認すると、東クシ動詞活用形の人称変化を観察すると、アフロアジア語で共有されている接尾辞活用との類似性が目立つ。

表 5 : 東クシ動詞活用形の人称変化

言語	サホ語	ソマリ語		レンディーレ語
		A	B	
動詞	<i>^cusub</i>	<i>cúsb</i>		<i>husúb</i>
1cs	<i>^cusub-iyó</i>	<i>cúsb-i</i>	<i>cúsb-ahay</i>	<i>husúb ahe</i>
2cs	<i>^cusub-itó</i>	<i>cúsb-id</i>	<i>cusúb tahay</i>	<i>husúb tahe</i>
3ms	<i>^cusub-á</i>	<i>cusúb</i>	<i>cusúb yahay</i>	<i>husúb yahe</i>
3fs			<i>cusúb tahay</i>	<i>husúb tahe</i>
1cp	<i>^cusub-inó</i>	<i>cúsb-in</i>	<i>cusúb nahay</i>	<i>husúb nahe</i>
2cp	<i>^cusub-itín</i>	<i>cusb-idín</i>	<i>cusúb tihiiin</i>	<i>husúb tihiiin</i>
3cp	<i>^cusub-ón</i>	<i>cusúb</i>	<i>cusúb yihiiin</i>	<i>husúb yihiiin</i>

(この表中の動詞は、全て「新しくある (be new)」を意味する。なお、ソマリ語の A と B は本稿中で参照するための便宜的なものである)

表 5 を見ると、サホ語では東クシ動詞活用形では男女の区別がされていないが、レンディーレ語では区別されている。ソマリ語はサホ語とレンディーレ語の中間段階にあり、A 列はサホ語と同系列の古い形で、B 列がレンディーレ語と同じ系列で**ah*「いる、ある」という動詞の接頭辞活用形が人称前接語となっている。サホ語とソマリ語 (A 列) では 3 人称単数の男女が区別されておらず、2 人称単数はどの言語でも男女が区別されていない。

表 6: アフロアジア諸語の接尾辞活用の人称変化

語派	クシ	エジプト	セム	ベルベル
言語	オロモ語	中エジプト語	アッカド語	タマハク語
1cs	<i>.a</i>	<i>.kw</i>	<i>.āku</i>	<i>.əg̃</i>
2ms	<i>.ta</i>	<i>.t(j)</i>	<i>.āt(a)</i>	<i>.əd</i>
2fs			<i>.āti</i>	
3ms	<i>.a</i>	<i>(.w)</i>	\emptyset	\emptyset
3fs	<i>.ti</i>	<i>.t(j)</i>	<i>.at</i>	<i>.ət</i>
1cp	<i>.na</i>	<i>.w(j)n</i>	<i>.ānu</i>	<i>.it̪</i>
2mp	<i>.tani</i>	<i>.twn(j)</i>	<i>.ātunu</i>	
2fp			<i>.ātinu</i>	
3mp	<i>.ani</i>	<i>.w</i>	<i>.ū</i>	
3fp			<i>.t(j)</i>	<i>.ā</i>

表 6 のオロモ語は南クシ諸語の 1 つで、アフロアジア祖語に遡る接尾辞活用を持つと考えられている (Stroemer 1987)。タマハク語はベルベル語派のうちリビアに分布する言語 (Lipiński 2001: 387) で、この接尾辞活用はアフロアジア祖語起源の接尾辞活用であるとされ、母音が後続する環境によって $k > g$ と $t > d$ という音変化を経ている。タマハク語では複数形で人称の区別がなくなっているが、単数形に関してはアッカド語などの接尾辞活用と対応が見られる。

表 5 と表 6 を比べると、確かにサホ語とソマリ語 (A 列) では 3 人称単数の男女が区別されていないものの、アフロアジア諸語の 3 人称男性単数との類似 (母音~ゼロ) は認められる。また、同じくサホ語とソマリ語 (A 列) において、2 人称単数・複数と 1 人称複数は、それぞれ $(V)tVn(V)$ と $(V)n(V)$ が含まれており、東クシ動詞活用形とアフロアジア諸語の接尾辞活用の強い繋がりが伺われる。

しかし Banti (2001) は東クシ動詞活用がアフロアジア諸語の接尾活用

ではないと考えた。Banti (2001) が着目したのは、東クシ動詞活用形の 1 人称接尾辞に含まれる子音である (表 7)。アッカド語はセム語派の中でも特に古い形を持っていると考えられており、1 人称に軟口蓋音が現れるのはアフロアジア接尾辞活用の共通点である。中エジプト語の状態形 (アフロアジア接尾辞活用) でも *k* が現れている一方、*sdm-f* 活用では *j* が用いられる。この *j* の正確な音価は分からないが、軟口蓋音ではないことが明らかで、わたり音 (glide) であると考えられている。

表 7: 東クシ諸語、中エジプト語、アッカド語の 1 人称単数標示

言語		1 人称単数標示
東クシ諸語	サホ語	<i>.iyó</i>
	ソマリ語 ⁹	<i>.i ~ -ahay</i>
	ブルジ語	<i>.i</i>
	レンディーレ語	<i>ahé</i>
中エジプト語 ¹⁰		<i>-j; .kw</i>
アッカド語		<i>.āku</i>

(ここでは接尾辞活用および *sdm-f* 活用に現れる標示を挙げている。)

表 7 に挙げた東クシ諸語の 1 人称標示を見てみると、サホ語とブルジ語では母音やわたり音だけで構成されている。ソマリ語でも元々はブルジ語と同様に母音 *i* のみであったが、後にという前接語が使われるようになった。ソマリ語 *-ahay* とレンディーレ語 *ahé* には喉音である *h* (声門音) と *h* (咽頭音) が含まれている。これら喉音が含まれる人称前接語は、存在動詞 **ah* 「いる、ある」の接頭辞活用形が起源であることが分か

⁹ ソマリ語では、より古い接尾辞と、より新しい前接語が、並存しており意味的な違いは見られず、両方とも同じ語基に付加される。

¹⁰ *sdm-f* 活用では接尾代名詞 (*-j*) が、状態形では状態形語尾 (*.kw*) が用いられる。異なる活用形に使われる形態素であるが共に 1 人称単数を表すので 2 つとも挙げた。

っている (Banti 2001: 7)。人称変化をした *ah* の接頭辞活用形と、東クシ動詞活用形の 3 人称男性単数形を起源とする不変形 (invariable form) が組み合わさっている。動詞の人称標示が *ah* に付き、語彙的な部分を不変形で表す構造となっている。

ソマリ語では本来の東クシ動詞活用形と新たな迂言的表現が並存しており、意味的な違いはみられない。レンディーレ語では完全に新たな表現のみが使われている。ソマリ語の東クシ動詞活用形の否定形は本来の東クシ動詞活用形に否定辞が付いた形態となっている。サホ語では、人称接尾辞で長母音化が見られるが、ソマリ語と同様に肯定形に否定辞が付加された形となっている。

アフロアジア祖語に遡る接尾辞活用と同根ではない根拠として、東クシ動詞活用形の人称語尾と東クシ語に再建される所有格代名詞の類似性が挙げられている (Banti 2001: 19-20)。

現存する東クシ諸語のほとんどで単数形は母音のみ、複数形は「母音 + *n*」となっており、3 人称に *s* は現れない。Banti (2001: 20) は *s* を保持している東クシ語の例として表 8 にあるようにカンバタ語、シダモ語、ジッドゥ語を挙げている。

表 8 : 東クシ語の *s* を含む 3 人称所有格代名詞 (Banti 2001: 20)

	カンバタ語	シダモ語	ジッドゥ語
3ms	- <i>si</i>	- <i>si</i>	- <i>s</i>
3fs	- <i>se</i>	- <i>se</i>	- <i>s</i>
3cp	- <i>ssa</i> < * <i>-sna</i>	- <i>nsa</i> < * <i>-sna</i>	- <i>s</i>

表 8 から、東クシ祖語にも 3 人称所有格代名詞に *s* が含まれていたと考えられ、表 9 のように所有格代名詞が再建される。表 9 は中エジプト語と東クシ祖語の接尾代名詞 (所有格) と東クシ動詞活用形の人称接尾辞の再建形を人称ごとに対応させたものである。

表 9 : 中エジプト語と東クシ祖語の所有格代名詞と東クシ動詞活用人称接尾辞 (Banti 2001: 19; Loprieno 1995: 63-64 参考)

	所有格代名詞		東クシ動詞活用 の人称接尾辞
	中エジプト語	東クシ祖語	
1cs	-j < *-aj	*yi ~ *yu (~ *ya)	*-i-yi (~ *-i-yu)
2ms	-k < *-ku	*ku ~ *ki (~ *ka)	*-i-tu
2fs	-t̄ < *-ki		
3ms	-f < *-su	*su (~ *si)	∅
3fs	-s < *-si	*si (~ *sa ?)	∅
1cp	-n < *-ina	*inu ~ *ni	*-i-nu
2cp	-tn̄ < *-kina	*kin ~ *kunV	*-i-tin
3cp	-sn < *-sina	*sinV ~ *sunV	∅

史前エジプト語から中エジプト語への間に、2 人称女性単数では *ki が硬口蓋化によって *ki/ > *k̄i/ > t̄¹¹ という音変化したと考えられ (2 人称複数でも同様に変化)、3 人称男性単数では *su が唇音化により *su/ > *sw/ > *ϕ/ > f という変化を辿ったと考えられている (Loprieno 1995: 64)。

東クシ祖語で 2 人称における文法的な性が区別されていたか明確ではないが、Banti は古代エジプト語と同様な音変化を経ていると考えており、史前エジプト語と東クシ祖語の所有格代名詞再建形は 3 人称以外で対応するとしている。

3.2.2 中エジプト語 *sdm-f* 活用との類似

Banti (2001) での主張 (2) は大別して 3 つの根拠に基づいている。その 1 つが両活用形に用いられる動詞の種類である。Banti (2001: 17) はコプト語まで使われ続けた *sdm-f* 活用に言及し、(8) のように次の 4 種

¹¹ Loprieno (1995: 64) は t̄ が無声硬口蓋破裂音 (IPA /c/) であると考えているが、正確な音声については明らかではなく暫定的なものである。

類であることを指摘している。

- (8) i. 助動詞
 ii. **meʔe** /meʔe/ 「知らない」、**ʔne** /hne/ 「望んでいる」
 iii. **pexe** /peje/ 「～と言った」
 iv. **naNY** /nanu/ 「良くある」、**naʔe** /naʔe/ 「豊富にある」、
naa /naa/ 「強大である」、**nece** /nese/ 「美しくある」

助動詞と **pexe** を除いて、残りのグループは精神的状態や質を表す動詞である。現存する東クシ動詞活用形の非過去時制でも同じように精神的状態や質などを表す動詞が用いられており、*sdm-f* 活用との歴史的に繋がっている可能性がある (Banti 2001: 17-18)。しかし中エジプト語ではこれ以外の動詞 (e.g. 行為を表す自動詞・他動詞) も *sdm-f* 活用を用いることがあるため、一概に東クシ諸語との繋がりを主張することができない。

仮に *sdm-f* 活用と東クシ動詞活用が本質的に状態動詞と相性のよい述語表現であるとする、中エジプト語では全ての動詞へ拡大適用されたと考えられる。そして、その中でも(8)で挙げられている種類の動詞は、コプト語まで化石化した表現として残った。しかし、これだけでは *sdm-f* 活用と東クシ動詞活用が歴史的に繋がっている、つまり起源と発達に関連性があるということは証明できない。

中エジプト語 *sdm-f* 活用との類似点 2 つ目は、名詞主語の場合に見られる 3 人称標示の不在である。中エジプト語 *sdm-f* 活用では主語が名詞によって明らかとなっている場合、代名詞による人称一致が現れない。東クシ動詞活用形においても中エジプト語と同様であったとしているが、これには大きな問題がある。表 9 にあるように、東クシ動詞活用形の 3 人称が東クシ祖語には全てゼロで再建される。つまり名詞主語であるかどうかに関わらず、代名詞によって 3 人称が標示されない。これについて Banti は、東クシ諸語がいくつかの段階を経て現在のようになったと

している (Banti 2001: 21) (表 10)。

表 10 : 東クシ動詞活用の変化 (Banti 2001: 21 参考)

	段階 1	段階 2	段階 3	
			(a)	(b)
1s/p	V-接尾代名詞	V-接尾代名詞	V-接尾代名詞	V- \emptyset
2s/p	V-接尾代名詞	V-接尾代名詞	V-接尾代名詞	
3s	V-接尾代名詞	V- \emptyset	V- \emptyset	
3p	~ V- \emptyset 名詞		V-語尾	

現在の東クシ諸語は表 10 の段階 2 から段階 3 にあり、3 人称がゼロ (ただし段階 3 の (a) では複数形を表す語尾が付加される) であるため、当然そこから再建される形もゼロとなる。しかし他の人称が接尾代名詞であることから、実際には祖語においても 3 人称が接尾代名詞で表されていたと推測される。Banti は東クシ祖語と中エジプト語が表 10 の段階 1 にあると考えており、名詞主語の場合にゼロになるとしている (Banti 2001: 20-21)。名詞主語は単複かかわらずゼロとなることから、段階 2 では代名詞主語でも 3 人称全体がゼロへと類推によって変化したことになる。段階 3 の (b) は本稿で挙げた言語ではレンディーレ語が該当する (表 5)。この言語変化の段階についても、あくまで Banti の試論であるので絶対的なものでもなく学説として確立したものでもない。

3 つ目の論拠は、接尾辞-Vn(n)のある東クシ動詞活用形の存在である。この活用形は東クシ動詞活用形の動詞に接尾辞-Vn(n)が付加されているもので、過去時制を表す。中エジプト語 *sdm-n-f* 形も基本形である *sdm-f* 形の動詞部分に-n が付加されており、完了相や過去時制を表す際に用いられる。

表 11 は左から中エジプト語 *sdm-n-f* 形 (肯定形・否定形)、ブルジ語の東クシ動詞活用形 (肯定形)、サホ語の東クシ動詞活用形 (否定形)、

レンディーレ語の東クシ動詞活用形（否定形）である。

表 11：中エジプト語 *sdm-n-f* 形と東クシ動詞活用形（過去時制）（Banti 2001: 9 参考）

	中エジプト語		東クシ諸語		
	肯定形	否定形	ブルジ語	サホ語（否定形）	レンディーレ語（否定形）
1cs	<i>V¹²-n-j</i>	<i>n V-n-j</i>	<i>V-ann-i</i>	<i>mâ-V-inn-iyôo</i>	<i>má V-an¹³</i>
2ms	<i>V-n-k</i>	<i>n V-n-k</i>	<i>V-an-du</i>	<i>mâ-V-inn-itôo</i>	
2fs	<i>V-n-ṯ</i>	<i>n V-n-ṯ</i>			
3ms	<i>V-n-f</i>	<i>n V-n-f</i>	<i>V-ann-i</i>	<i>mâ-V-inn-âa</i>	
3fs	<i>V-n-s</i>	<i>n V-n-s</i>			
1cp	<i>V-n-n</i>	<i>n V-n-n</i>	<i>V-ann-inu</i>	<i>mâ-V-inn-inôo</i>	
2cp	<i>V-n-ṯn</i>	<i>n V-n-ṯn</i>	<i>V-an-čingu</i>	<i>mâ-V-inn-itiinî</i>	
3cp	<i>V-n-sn</i>	<i>n V-n-sn</i>	<i>V-ann-ingu</i>	<i>mâ-V-inn-oonî</i>	

（サホ語 *mâ*：否定辞、レンディーレ語 *má*：否定辞）

現在の東クシ諸語において肯定形でもこの接尾辞-*Vn(n)*を含む活用形が存在するのはブルジ語だけである (Banti 2001: 10)。これについて Banti はアラビア語の例を挙げて説明している (表 12)。アラビア語の過去時制を表す動詞形は表 12 のように肯定形と否定形で異なる活用システムが用いられている。肯定形は接尾辞活用でありながら、否定形では接頭辞活用であることが明らかである。それに対して、より古い時代のセム語であるアッカド語では、肯定形も否定形も接頭辞活用であることが分

¹² *V* は動詞を示す。動詞部分には人称による変化が見られないため、言語ごとに一貫して同じ形態の動詞が入る。

¹³ レンディーレ語では過去時制の否定形において人称変化が完全に失われている (人称不変形 *invariable form*)。これは表 10 の段階 3 (b) にあたる。

かる。これはアラビア語が発達する過程において過去時制を表す動詞形（接尾辞活用）が新たに生まれたが、否定形は変わらずに古い語形を保ったことによる。ほとんどの東クシ諸語で接尾辞-Vn(n)を含む動詞形が否定形にだけ見られるのは、表 12 のアラビア語と同じような状態であるからだと Banti は考えている。

表 12 : アラビア語とアッカド語の過去時制の動詞形
(Banti 2001: 11 参考)

	アラビア語		アッカド語	
	肯定形	否定形	肯定形	否定形
1cs	<i>banay-tu</i>	<i>lam ?a-bni</i>	<i>a-bni</i>	<i>ul a-bni</i>
2ms	<i>banay-ta</i>	<i>lam ta-bni</i>	<i>ta-bni</i>	<i>ul ta-bni</i>
2fs	<i>banay-ti</i>	<i>lam ta-bnī</i>	<i>ta-bnî</i>	<i>ul ta-bnî</i>
3ms	<i>banā</i>	<i>lam ya-bni</i>	<i>i-bni</i>	<i>ul i-bni</i>

表 13 : サホ語とソマリ語の語幹拡張-n-を持つ動詞
(Banti 2001:13 参考)

言語	語幹拡張-n- (関連語彙)
サホ語	<i>qamh-ini</i> 「冷たい」 (アファル語 <i>qamahe</i> 「冷たくなる」、ソマリ語 <i>qaham-ood-</i> 「冷たく感じる」)
	<i>fid-ini</i> 「広い、広げられている」 (アファル語 <i>fidise</i> 「広げる」、ソマリ語 <i>fid</i> 「広がる」)
ソマリ語	<i>beer-an</i> 「耕されている」 (ソマリ語 <i>beer</i> 「耕す」)
	<i>qayb-s-an</i> 「隔たれている」 (ソマリ語 <i>qayb-is</i> 「隔てる」)

Banti 以前の研究者たちはこの接尾辞 Vn(n)をコピュラ (連結詞) が文法化したものであると考えていた (Banti 2001: 10)。しかしそこで予想されたコピュラ *inna* は現在のサホ語やソマリ語には存在しない形であ

り、その同根語は、同じく *n* 過去時制形を持っているブルジ語やオモ・タナ諸語に見られない。Banti (2001: 10) はこの接尾辞 *n* がサホ語やソマリ語に存在する語幹拡張 (stem extension) *-n* と関わりがあるのではないかとしている (表 13)。この語幹拡張-*n* は「一定の状態が継続する」というニュアンスを動詞に与えるもので、中エジプト語 *sdm-n-f* 形の持つ意味機能 (完了相) と通ずるところがある。「*n* は前置詞である」という従来の説とは異なる解釈であるが、十分に可能性があり、クシ語派との系統的な近さを感じさせられる。

4 2つの仮説を踏まえた筆者の考察

Satzinger (2003) の提示している *sdm-f* 活用の発達過程は、アフロアジア祖語の段階で能格の存在することが鍵となっている。現代のアフロアジア諸語は対格言語であるという見解が一般的であることから、Satzinger (2003) を支持すれば、能格言語から対格言語へと変化していったことになる。そして史前エジプト語が能格言語であったとすれば、中エジプト語が能格の痕跡を持つ対格言語であることの説明がつく。しかし、NENA のケースのように、能格言語との接触によって対格言語に能格性が現れる可能性も残されている。

一般にアフリカやヨーロッパでは能格言語が稀であると言われるが、全く存在しないというわけではない。例えばアフロアジア語族クシ語派には「有標の主格」があり、またナイル・サハラ語族のナイル諸語には「無標の対格」が存在する (Cysouw 1998: 5 ; Dixon 1994: 64-65)。

通常、主格は無標であり、対格が有標となる。つまり対格言語では、他動詞の目的語に何らかの標示が現れたり特別な形が用いられたりする。それに対して能格言語では、能格が有標で絶対格が無標であり、他動詞の主語に標示が現れるということになる。「有標の主格」や「無標の対格」は、それぞれ能格と絶対格と似た存在であるが、能格言語では自動詞の主語が無標の絶対格になるのに対して、有標の主格は自動詞の主語としても現れる。無標の対格も同様に通常のと対格が期待される場所に現れる

が形態として無標であるために絶対格との類似性が指摘される。よって、これらを持つ言語において、主格と対格はどちらも有標（あるいは無標）であると言える。

史前エジプト語が、このようなクシ語派やナイル諸語に存在する能格言語と対格言語が混ざっているような言語と系統的に近いか直接の言語接触があったことが分かれば、Satzinger (2003) が仮定したような能格言語的な性質を史前エジプト語に認めることができる。Banti (2001) 説は、クシ語派とエジプト語派の系統的な近さを支持する論拠の 1 つとなる。

Satzinger (2004: 488-489) によれば、所有格代名詞を人称に用いるのは東クシ動詞活用形だけでなく、他のアフロアジア諸語にも存在している。クシ語派の例が挙げられていないが、ベルベル語派カバイル語 (Kabyle) のアイト・ズィヤン方言 (Ayt-Ziyan) ではアフロアジア語共通の接尾辞活用の人称が接尾代名詞と入れ替わっている (表 14)。

表 14 : カバイル語標準方言とアイト・ズィヤン方言の比較 (Satzinger 2004: 488 参考)

	カバイル語 標準方言	アイト・ズィヤン 方言	意味
1cs	<i>zggwagg-ag</i>	<i>zggagg-iyi</i>	「私は赤い」
2ms	<i>zggwagg-ed</i>	<i>zggagg-ik</i>	「あなたは赤い」

また、Satzinger (2004: 488-489) は南セム語のゲエズ語にも接尾代名詞を人称標示として用いる動詞形が存在することを指摘している。副詞的に用いられる動詞的名詞 (converb と呼ばれる) が主語人称なしでは *qatīl-a* 「殺す時に、殺している間に」となるが、接尾代名詞を伴って **qatīl-a-hū* > *qatīlō* 「彼が殺した時に」という用法がある。さらに形容詞を用いる状況の表現でも主文の主語に対応する人称が接尾代名詞の形で

現れる、*tekūz-e-ka* 「(あなたは) 悲しんでいる (状態にある) (you being sad)」という形が現れる。

これらのことから接尾代名詞によって人称を表す試みはエジプト語に限られたものでないことがわかる。そしてクシ語派、ベルベル語派、セム語派においてこの特徴は一部の言語や方言のみで確認されている。同語族ではあるが、時代や場所が大きく異なる少数の言語のみで共通した特徴が現れている。そのため、一概に祖語から受け継いだ特性であるとは言えないが、アフロアジア語族で起きやすい言語変化であるとは考えられる。

5 おわりに

中エジプト語 *sdm-f* 活用と明らかに同起源の動詞活用は未だ見つかっていない。しかし、いくつかの要素を共有するものは、やはり数は多くないが、アフロアジア諸語で確かに存在することがわかった。*sdm-f* 活用の起源と発達の解明は、アフロアジア語族（特に東クシ諸語）の研究を進めることにより進展する可能性がある。

能格性の存在についてここでは確証が得られなかった。だが能格性は従来の見解（「*sdm-f* 活用は名詞的動詞形と所有表現から構成されている」と相反するものではなく、むしろ支持するものであり、今後の研究において考慮に入れていく必要がある。

また語幹拡張の使用はアフロアジア諸語に限らずアフリカの諸言語で広く見られる現象であるため、言語の分布がアフロアジア語族と重なっているナイル・サハラ語族などの言語についても調査を行なう必要があることが予見される。

【参考文献】

- Allen, J.P. (2010) *Middle Egyptian: an introduction to the language and culture of hieroglyphs*. Second and revised edition. Cambridge: Cambridge University Press.
- Banti, G. (2001) ‘New Perspective on the Cushitic Verbal System’. In A. Simpson (ed.) (2001) *Proceedings of the Twenty-Seventh Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society. March 22-25, 2001. BLS 27s*. California: Berkeley Linguistics Society. 1-48.
- Buccellati, G. (1997) ‘Akkadian’. In: R. Hetzron (ed.) *The Semitic Languages*. London and New York: Routledge. 69-99.
- Cysouw, M. (1998) *Pronoun descriptions: Nilotic*. Manuscript. [<http://email.eva.mpg.de/~cysouw/pdf/cysouwNILOTIC.pdf>] (Last access: 20 June 2012).
- Dixon, R.M.W. (1994) *Ergativity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Doron, E. and G. Khan (2012) ‘PCC and Ergative Case: Evidence from Neo-Aramaic’. In: J. Choi et al (2012) *Proceedings of the 29th West Coast Conference on Formal Linguistics*. Somerville, MA: Cascadilla Proceedings Project. 46-53.
- Gardiner, A.H. (1957) *Egyptian Grammar*. 3rd edition. Oxford: Griffith Institute.
- Hackett, J. (2006) “Semitic Languages.” In: K. Brown & S. Ogilvie (eds.) (2009) *Concise Encyclopedia of Languages of the World*. Oxford: Elsevier Ltd. 929-935.
- Hudson, G. (1997) ‘Amharic and Argobba’. In: R. Hetzron (ed.) (1997) *The*

- Semitic Languages*. London and New York: Routledge. 457-485.
- Johnson, J.H. (2004) *The Demotic Verbal System*. Chicago: Oriental Institute of the University of Chicago.
- Junge, F. (2005) *Late Egyptian Grammar: An Introduction*. Oxford: Griffith Institute.
- Khan, G. (1999) *A Grammar of Neo-Aramaic*. Leiden: Brill.
- Khan, G. (2007) "The Morphology of Neo-Aramaic." In: A.S. Kaye (2007) *Morphologies of Asia and Africa, volume 1*. Winona Lake, Indiana: Eisenbrauns. 309-327.
- Lipiński, E. (2001) *Semitic Languages Outline of a Comparative Grammar*. Second edition. Leuven: Uitgeverij Peeters.
- Loprieno, A. (1995) *Ancient Egyptian: A linguistic introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Pardee, D. (1997) 'Ugaritic'. In: R. Hetzron (ed.) (1997) *The Semitic Languages*. London and New York: Routledge. 131-144.
- Peust, C. (1999) *Egyptian Phonology: An Introduction to the Phonology of a Dead Language*. Göttingen: Peust und Gutschmidt Verlag.
- Polotsky, H.J. (1944) *Études de syntaxe copte*. Le Caire: Publications de la Société d'Archéologie Copte.
- Polotsky, H.J. (1965) 'Egyptian Tenses'. *The Israel Academy of Sciences and Humanities*. Vol. II, No. 5. Jerusalem.
- Polotsky, H.J. (1976) 'Les transpositions du verbe en égyptien classique'. *Israel Oriental Studies* 6. 1-50.
- Satzinger, H. (2003) 'The Egyptian Conjugations within the Afroasiatic Framework'. In: Z. Hawass & L.P. Brook (eds.) (2003) *Egyptology at the Dawn of the Twenty-First Century. Proceedings of the Eighth International*

- Congress of Egyptologists, Cairo 2000*. Vol. 3. Cairo: American University Press. 392-400.
- Satzinger, H. (2004) 'Statuses and Cases of the Afroasiatic Personal Pronoun'.
In: G. Takács (ed.) (2004) *Egyptian and Semito-Hamitic (Afro-Asiatic) Studies in Memoriam W.Vycichl*. Leiden & Boston: Brill. 487-498.
- Sethe, K. (1899) *Das Ägyptische Verbum im altägyptischen neuägyptischen und koptischen*. Band 2. Leipzig: J.C. Hinrichs.
- Steiner, R.C. (1997) 'Ancient Hebrew'. In: R. Hetzron (ed.) (1997) *The Semitic Languages*. London and New York: Routledge. 145-173.
- Stroomer, H. (1987) *A Comparative Study of Three Southern Oromo Dialects in Kenya*. Hamburg: Helmut Buske.

A comparative Afroasiatic linguistic approach to the Middle Egyptian *sḏm-f* conjugation

Hiroshi YOSHINO

The study of ancient Egyptian traditionally employed the internal reconstruction and the Semito-Egyptian comparison. The *sḏm-f* conjugation, the most basic verbal conjugation of the Middle Egyptian, has been studied for over a century with these methods. However, there still remains uncertainty about its origin and development. There are currently several new studies within the Afroasiatic framework, in which the *sḏm-f* conjugation is approached in different ways to the traditional ones. This research note examines two hypotheses that are presented by two different scholars, Satzinger (2003) and Banti (2001), in order to see their prospects concerning the *sḏm-f* conjugation.

Doctoral Program in Literature and Linguistics

University of Tsukuba

1-1-1 Tennodai, Tsukuba, Ibaraki 305-8571, Japan

E-mail: s1130021@u.tsukuba.ac.jp